

シッコクノユキ

作者：ストック

概要：キミは一度見たら忘れることを赦さないと云うような、甘い甘い笑顔を浮かべたまま、何の躊躇いもなく僕の心臓を抉った。

シッコクノユキ

キミは一度見たら忘れることを赦さないと云うような、甘い甘い笑顔を浮かべたまま、何の躊躇いもなく僕の心臓を抉った。

キミが阻むその向こう側の景色さえも透けてしまうのではないかと錯覚する程色素の薄い肌には、桜色の唇が含羞を湛えたまま浮かび、キミの孕んでいるはずの熱を薫らせる。風に弄ばれる長い黒髪は、其の実風を弄んでいる。

身体を支えていた力はゆっくりと遠退いてゆき、やがて僕はキミの前に跪く。呼吸が置き去りにしてゆこうとする意識を、キミの婉麗な微笑みだけが束縛して呉れる。

僕はいつの間にか涙を流していた。

何故泣いているのかは解らないけれど、キミが顔を近づけ、舌で掬い取ってくれたから、この涙の意味を僕は考えない。

キミは唐突に僕の頭を撫でた。酷く優しい手つきだった。

キミは僕の頬に触れた。キミの指は細くて冷たくて、まだ僕が活着ていることを教えてくれた。

それからキミは、僕の首にその心許無い両掌を絡めた。喉骨に触れる親指から、首の後ろに回した人差し指、中指、薬指、小指と丁寧に力を込めていく。

苦しくて僕は喘ぐ。だけどそれにさえ気付かないふりをして、キミは僕の唇を塞ぐ。纏わりついてくる舌が堪らなく甘い。甘くて甘過ぎて没頭する。一瞬でも長く絡みついていた。吸いつくように舐るとキミも応えてくれる。僕のものかキミのものかも解らない唾液が口内に充満する。甘い。ただ甘いと思う。だけどキミが離れていく。離れないで欲しいと舌を伸ばし、キミの中を犯す。キミの中はどうしようもなく温かく柔らかい。僕はキミの矮躯に腕を回し、力一杯に抱き纏る。キミは少し息苦しそうに喘ぐと、一層指先に力を込めた。

その瞬間、キミの身体が消えてなくなった。否、キミを抱き締めているという幻想が霧散しただけだった。

僕はいつの間にか終わっていた。

幻想さえも失くした僕を孤独が蝕んでいく。首に絡みついていたキミの掌がついに僕から離れ、何も残っていない僕は地面に横たわる。視界がぼやけていく。

僕は最後にキミを憶えようと思った。

キミの姿はもう殆ど見えなくなっていた。すぐ其処にいるのに、キミはぼやけて二人にも三人にも、十人にも二十人にも見えた。

キミは未練も罪悪も僕の元には残して呉れず、次の人の処へと向かう。キミはそうやって放蕩していたのだと、今思う。一体これまでにどれだけの人を陥溺(かんでき)させ、これからどれだけの人を壊すのか。

僕には皆目検討もつかない。

だけど。

それでもぼくは、キミのことをすごくきれいだとおもった。

アトガキ

拙作「シッコクノユキ」は「桎梏之雪」と書きます。

「桎梏」とは「手枷や足枷のように、行動・生活などの自由を厳しく束縛するもの」のことです(三省堂提供「大辞林 第二版」より)。我々人間にとって、ある意味で最大の自由は「生きる」ということであり、それを束縛するもの、それはまたある意味で即ち「死」ぬことだとも言えると思います。最も原始的で根源的な話をすると、死んでしまうからご飯を食べ、生きられなくなるからあらゆる外敵から身を護ります。あらゆる価値観がありますが、仮にこの因果律で考えるならば「死」は「生」を「束縛」するものだと言えると私は考えました。

そして雪は、またある意味で人間のような、更に言えば少女のような印象を個人的には受けました。常々私は「どうせ寒いなら、雪が降れば良いのに」と思っていました。それは単に雪が降っている間の景観が個人的に風情があると感じていて、その中を歩くことが堪らなく好きなのです。ともすれば、傘なんて差さずに歩きたくなります。あんなに真っ白で触れると溶けてしまって、なくなってしまう。それは何処まで行っても綺麗で儂くて興味深い。

けれど雪は、塵や屑を含んでいるし、この世界の何処か、なんていわず、ちっぽけな日本においてですら、雪は降ると積もり、積もり過ぎれば簡単に人の命を奪ってしまう。

あんなに真っ白で綺麗なのに、人を容易く殺してしまう。

たまらない気持ちになりました。自然の現象だから仕方がないなんて、思えなかった。未然に防げる死を、全く無為だと言えるその死を思うと、堪らなく悔しかった。この私の命は、救えるものでさえ救えない。この両手は差し伸べられたはずなのに、敵わない。

このどうしようもない不条理に居た堪れなくなり、書いた作品です。

あなたにとって何かのキッカケになれば良いな、と心から思います。物語に殆ど触れていないのは、余り限定的な見方をして欲しくないからです。あなたの価値観であなたが感じたものを大切にして頂ければ本望です。

「シッコクノユキ」はあなたにはどのように映りましたか。

もしも本作品がお気に召しましたら、本サイトである「[恋愛小説専門サイト・「夢の扉」](#)をあわせてご覧下さい。

この作品をご覧いただいた皆様に、この上のない感謝を。またお会い出来る日を心よりお待ちしております。